

翻訳

クリスティナ・ロセッティの劇的独白（１）

「修道院の敷居」——解説と翻訳——

Christina Rossetti's Dramatic Monologues (1)

—— An Annotated Translation of “The Convent Threshold” ——

滝 口 智 子

Takiguchi, Tomoko

ABSTRACT

This is an annotated Japanese translation of Christina Rossetti's dramatic monologue titled “The Convent Threshold”. The dramatic monologue is a genre of poetry where unconscious self-revelation is often more important than the speaker's conscious self-expression. “The Convent Threshold” is a good example of this genre, featuring a female speaker who committed a “sin” with her former lover, the silent auditor of the monologue. The speaker repeatedly asks him to “repent”, apparently wishing for his salvation in heaven. The monologue, however, actually reveals her deep grudge and anger against him, through the fearful representation of the woman as a vengeful specter without a face and as a revived corpse.

<解説>

「修道院の敷居」（“The Convent Threshold”）はクリスティナ・ロセッティ（Christina Rossetti, 1830–1894）の第一詩集『小鬼の市とその他の詩』（*Goblin Market and Other Poems*, 1862）所収の作品で、1858年に創作された。手書き原稿の原題は「修道院の敷居より」“From the Convent Threshold”となっている。修道院に入ろうとする女性がかつての恋人に当てた書簡体形式の作品であるが、

まるでそこにいるかのような恋人への呼びかけなどから、実際に聴き手を目の前にして語りかける「劇的独白」の一形式と捉えることも可能である。

詩の語り手が修道院に入る決心をした理由は明らかにされていない。理由を語っていると思われる詩の冒頭3行は多義的である。かつて恋人たちの恋愛が原因で両者の親族間に血の争いがあったのかもしれないし、恋人たちは近親相姦の禁忌を犯していたのかもしれない。いずれにせよ、語り手は恋人とともに「快い罪」を犯したと自覚している。足は泥に汚れ、胸には血の染みがついている、という語り手の自己描写は、彼女が19世紀のイギリスで頻繁に描かれた「墮落した女」(fallen woman)、つまり婚外で男性と性的な関係を結んだ女性であることを物語っている。

劇的独白形式の詩には、往々にして語り手が自覚的に語っていることと、無意識のうちに暴露してしまう自身の姿とのあいだの乖離がある。「修道院の敷居」においてもその乖離が顕著に見られる。つまり語り手は罪深い女性だと自覚しているが、その語りからにじみ出てくるのは、自分は実は無垢な女性であり、社会から不当な罰を受けた殉教者たちと同等だ、という無意識の訴えである。さらに、語り手はかつての恋人に対して「いつまでも地上の喜びに浸るのはやめて、天に心を向けよ」との助言を送っている。語り手は彼の宗教的救いを願い、彼のためを思って呼びかけているつもりである。しかし実際に語り手が明らかにするのは、「私が悔い改めているのに、何故同じ罪を犯したあなたが悔い改めないのか」という女の深い恨み、怒りである。演劇的な行為としての語り手が、こうした隠れたメッセージを効果的に伝えることに成功している。恨みと怒りを伝達する際に、体が分断された亡霊や生ける死体などのゴシック的イメージが用いられる。顔から切り離されたまま執拗に「悔い改めよ」と繰り返す唇と、墓をあばいた恋人に地中から語りかけるぐっしょり濡れた死者の姿は、男に復讐する「墮落した女」の恐ろしい表象となっている。

翻訳の原詩として、テキストはChristina Rossetti, *Goblin Market, The Prince's Progress, and Other Poems* (London: Macmillan and Co., 1875)を使用した。

「修道院の敷居」にかんして、訳者は「イヴの娘たち—クリスティナ・ロセッティの劇的独白—」『中国四国英文学研究』創刊号（平成 16 年 10 月、1-11 頁）において論じている。

<翻訳>

修道院の敷居

愛しい人よ、私たちの間には血が流れている。
父の血が、兄の血が流れている。
この血がふたりの間に立ちはだかっている。
だから天に続く階段をのぼろうと思います、
一段一段金いろの階段をのぼり、
あの都を、あのガラスの海をめざしていきたいのです。
百合のように清らかだった私の足は、泥にまみれている。
この深紅の泥は過去に抱いた希望、
過去に犯した過ち、空しく終わった愛を物語る。
ああ、この心をお見せしましょうか、
同じような赤い染みで汚れているのがわかるように。
この染みを洗い流すため、悪魔の罠を焼ききるために、
ガラスと炎の海を求めていくつもりです。
ほら、あの階段をのぼれば私たちは高みに
到達できる——だから、さあ、
きらきら輝く階段を一緒にのぼってゆきましょう。

地上に向けられたあなたの瞳。でも私は天を仰いでいる。
私の瞳に映るのは壮大な都、丘の向こうの
豊かに水をたたえた大地。

崖の向こうに立ち並ぶ館，きらめく都。

そこでは正しき人びとが宴を楽しんでいる。

木立に囲まれて休息し，目覚めては

智天使ケルビムや熾天使セラフィムと共に賛美歌を歌う人びとも，

かつては十字架を背負い，苦しみぬいていたのだ，

いたぶられ，焼かれ，粉々にされ，手足をもがれて。

人間のくずと呼ばれて。

星々が輝く天が生まれ，いま彼らは

太陽の薄い光に照らされている。

地上を見つめているあなた，いったいそこに何があるというの？

地上には乳白色の肌とばら色の頬をもつ人びとが，

木々の間を軽やかにかけまわっている。あちらこちらに，

幸せそうに満ち足りて，葡萄酒を飲んで楽しそうに，

朝露が光る桃の花のように輝いて，

金色の髪をそよ風に揺らしながら，

小鳥のように愛の歌をうたいながら，

若き男女が行き交う。

そこを離れたくないのね。でももう時間がないわ，

命がけでお逃げなさい，勇気を出して，

逃げなさい。伸びてゆく影が告げている，

もう日が暮れる，夜は近い，と。

山へ逃げるのよ，ぐずぐずしないで！

笑ったりため息ついたりしていないで，

気まぐれな青い鳥が巣を作り，戯れる木陰で

歌なんかうたっていないで。

いたずらに時は流れ，あなたはぐずぐずしている。

今日という日が暮れないうちに、
跪き、闘い、身を捧げ、激しく祈りなさい！
今日という日は短く、明日はすぐそこに来ている。
このままでは死んでしまうわ、なぜわからないの？

あなたは私とともに罪を犯した、快い罪を。
だからともに悔い改めなさい、私も悔いているのだから。
ああ、何故知ってしまったのだろう、あのことを！
ふたり手を取りあい、何と平易な道を歩んできたことか、
引き返すときはあんなに苦しい道を！
いつになれば安らかに眠れるの、
この長い夜と昼はいつまで続くの？
穢れを知らぬ天使たちが叫ぶ、「彼女は祈っている」と。
「苦い涙をこぼして魂を浄化している」と。
この長い年月に、まだずっと耐えなければならないの？

あなたから顔を背けるわ、この頬も、瞳も、髪も、
あなたが私を二度と見ることをないように。
ああ、喜びはとうに過ぎ去った！ただどなんてなつかしい、
死にゆく喜び、消え去る恋！
ただ私の唇だけがあなたの方を振りかえり、
鉛色の唇が叫ぶ、「悔い改めよ」と。
ああ、なんて苦しい人生、苦しい懺悔の日々、
星々の見えない時間よ！

たったひとりきりで、どうしたら
天国で安らぎが得られるというの？

聖人や天使が愛について語ってくれたとしても

答える気持ちになどなれるはずないわ。

ああ、私をどうか哀れんで、お友達よ！

こんな声がどこからか聞こえてくるのです。

憧れに突き動かされて、せつない気持ちで、

地上に目を向けてはいけないというの？

ああ、天上での苦しみから救われますように！

私たちが交わしたあらゆる喜びにかけて、

悔い改めよ、悔い改めよ、許しを求めよ！

長い人生もいずれ終わりが来るのだから、

悔い改めて、その魂を洗い清めよ！

悔い改めたときに天使がうたうのは

星たちが生まれた朝にうたう歌よりも

喜ばしい歌なのだから。

昨夜見た夢をお話しましょう。

神々しい顔をした精霊が、炎と燃える足で

どこまでも上へのぼってゆく夢を。

百の翼がばたばた音をたて、

天の鐘が喜びいっぱいに鳴り響く。

天の空気は精妙な香りに満ちて、

地上は壮麗な乗り物のように疾走する。

のぼりながら「もっと光を！」と叫ぶ

精霊は、光を全身に浴びている。

天使や大天使よりも早く、

勝ち誇り、力強くのぼってゆく。

ケルビムの衣の裾を踏みつけて、

「もっと光を！」と叫び、
 喉が渴いたので顔を海に浸す。
 渴きが激しすぎて、どんなに飲んでも満ち足りることがない。
 彼は知識を呑みこみ、
 痛む額から光輪をはずしていた——
 彼の巻き毛は裂かれた蛇のようにうねり——
 玉座から這い降りてセラフィムの
 足についた塵を嘗める。
 いったい知識とは何？
 知識は強いものだけれど、愛は優しい。
 そう、彼がこんなにのぼっても
 学んだことは一つだけ、
 すべてはつまらないこと、ただ愛を除いては。
 かけがえのないもの、それが愛。

昨夜見た夢をお話しましょう。
 そこは暗くもなく明るくもなく、
 冷たい露の滴が私の豊かな髪を
 濡らしていた。地中に眠っていると
 あなたが私を探しに来て、
 「僕の夢を見ていたの？」と問いかけた。
 あなたに会えば心躍らせた私が、今は塵となって
 なかば眠りつつ答えた、
 「私の枕は濡れています。私の敷布は赤く染まっています。
 このベッドを覆うのは鉛の天蓋。
 あなたは暖かいお相手を探さない、
 顔を寄せあい、一緒に眠る暖かい体を、

私よりも優しい恋人を。」

手をもみしだくあなたの前で、私は鉛のように
ぐっしょり濡れた地中深く押しつぶされていった。
あなたは手を打ち、よろめき倒れんばかりだった、
喜んでいるわけでも酔っているわけでもないのに。

こうして一晩中あなたの夢を見ていたの。

目覚めては心ならずも祈っていた。

眠りに落ちればまたあなたの夢。

とうとう私は身を起こし、跪いて祈った。

どんな言葉で祈ったか——それは、言えません。

涙も乾いた私の口からゆっくり、ゆっくり言葉がこぼれた。

だけど深夜の暗闇に、私の沈黙が

とどろいた、雷鳴のように！ 朝が来ると

私の顔はしなびて、髪が真っ白になっていた。

血が凍りついた窓辺で、苦しみのあまり

息も絶え絶えに横たわっていた。

もしも今あなたが私を見たら、

愛しいあの顔は今どこに、と問うことでしょう。

私は答えるでしょう、「もうとうに旅立ちました」と。

天上でヴェールをかぶり待っています、と。

明けの明星が上り、

地上が陰と共に消え去り

扉の内側にふたり一緒に入ったら、

そのときこそ私のヴェールをはずしてください。

天を仰いでのぼってきてください、はるか天上で

棕櫚の木が育ち、私たちの席が用意されているのですから。

そこできっと、昔のようにお会いしましょう。

愛しあいましょう、そう、遠いあの日と同じ気持ちで。